『日本アジア研究』第十四号（二〇一七年三月）

東京芸術大学附属図書館蔵『利久居士茶道百首』攷―附釈文―

趙亜男*

江戸時代の茶道において、千利休の教えと見られるものを和歌の形にした「利休道歌」が世に伝わり、よく知られている。現在にいたっても、「利休道歌」「利休百首」の注釈書類が相次いで出版されており、茶の初心者や茶人たちに愛用されている。小論は、これまで検討されていない東京芸術大学附属図書館所蔵の『利久居士茶道百首』（以下芸大本と称す）を研究対象として、その成立年代と構成を紹介したうえ、他伝本との校合を通して、芸大本と「紹鷗百首」との関係を分析し、本伝本の意義を試論した。

七伝本と校合した結果、芸大本は「紹鷗百首」系統の諸伝本と同じ歌を数首持っていることから、「利休百首」系統より「紹鷗百首」系統により近いことが分かった。そして、筒井紘一氏を代表とする先学たちの研究成果を踏まえて、小論は次の説を提示する。芸大本は、千利休以降茶の湯が遊芸化から精神化へと発展している江戸中後期、ある流派の茶人が侘茶の宗旨を目指して千利休の名を冠して制作したものである。現存諸本のなかに百首に整っている最古の写本として、そこには作者の編集意識が現れているではないかと考える。

最後に、茶道百首の研究に新しい情報を提供することと、茶道流派における家元システムの成立と発展に対する研究に、芸大本の意義があることを論じた。

キーワード：「利休道歌」、『利久居士茶道百首』、紹鷗百首

* ちょう・あなん、埼玉大学大学院文化科学研究科博士後期課程　茶書文献学

一　はじめに

茶道において、千利休の教えと見られるものを和歌の形にした「利休道歌」が世に伝わり、よく知られている。現在においても、「利休道歌」「利休百首」の注釈書類が相次いで出版されており(1)、茶の初心者や茶人たちに愛用されている。それに対して、底本として扱われている諸本に対する関心が低く、それに関わる研究がそれほどなされていないのは実情である。

先行研究で、まず注目したいのは「茶道百首」の系統整理をめぐる石塚修氏の研究である。氏は「利休教歌の系統と展開―百首歌を中心に―」(『文藝言語研究・文藝篇』、二〇〇七年一〇月)で『吃茶詠一百四十七首』を八本の伝本との校合を通じて、それらが三つの系統に分れること、そして『吃茶詠一百四十七首』と『紹鴎茶湯百首』『遠州侯茶道百首』とは同じ系統に属すると指摘した。

次に、筒井紘一氏著『茶書の系譜』の中には百首の系統に関連する記述が次の二箇所が見られる。

道歌を生み出す茶道界の動向に刺激されて、江戸初期のある時点でまとめられたのが「茶道百首」と呼ばれるものであった。この系統に属するものとして『紹鴎百首』『利休百首』『遠州百首』『南坊二百首』と称する四つが残されている。(2)

江戸後期になると以上の百首歌とは別の系統に属する道歌・教訓歌もいくつか伝えられている。(3)

また、筒井氏は同書には、伝本の紹介を行い、和歌内容を比較した結果、「利休百首」、「紹鴎百首」、「遠州百首」という題はついているが、結局は数首の入れ替えがあるだけで同一の内容を持つものであるということである。」(4)という結論を付けた。

『国書総目録』『古典籍総合目録』を調べたところ、「利休百首」、「紹鴎百首」、「遠州百首」という三つの作品が「茶道百首」として記載されていることが確認できた。なかには、同一書として収録されている諸本のすべてがかならずしも同一系統に属するものではないことも、本文の配列と内容を比較すれば分かる。したがって、記載されている諸本が実際にどの系統に属するものなのかは、一つ一つ調査する他ない。

東京芸術大学附属図書館所蔵『利久居士茶道百首』(以下芸大本と略称する)が上述したような特別の存在である。本書は国文学研究資料館「日本古典籍総合目録データベース」に収録されているにもかかわらず、これまで検討されてこなかった。小論は、先学の研究成果を踏まえて芸大本を取り上げ、まずその成立年代と構成内容を紹介し、さらに他伝本との校合を通して、芸大本と「紹鴎百首」との関係とその意義の解明を試みたい。

二　芸大本の書誌と成立年代

東京芸術大学付属図書館上野校地図書館本館に所蔵されており、整理番号はR791／4である。袋綴。縦二三・六×横十六・九糎。楮紙。栗色表紙があり、表紙の左上に縦十四×横二・九糎の題簽が貼付されている。外題は以下の通り。

利久居士茶道百首
久羅婦山
香道壽賀枕

巻頭に序文が書かれ、序文の右上に「東京芸／術大学／図書印」という単郭朱色の蔵書印が見られる以外、他所に蔵書印は存し

ない。

『利久居士茶道百首』には、異なる日付が二箇所記されている。一箇所は巻頭に附されている序文の直後にある。

慶長三戊戌年　利休居士
十月札朔日　宗易

もう一箇所は末尾

安永二癸巳年霜月朔日　岩波氏舄(ママ)之

慶長期(一五九六～一六一五)、古活字版の『見咲三百首和歌』が既に版行されたと見られている。しかも筒井紘一氏は『茶書の系譜』ではそれについて利休百首道歌の原形をなす歌がつくられていたと述べ、『見咲三百首和歌』と利休百首との密接な関連を指摘した(5)。

さらに、慶長三年(一五九八)の年紀は、今日庵文庫に所蔵されている写本『茶之湯百首　附続茶之湯百首』(以下今日庵本と略称する)の奥書には「慶長三年三月日」と記されている。それに関して『茶書の系譜』には論及はないが、同書より一年前に発表された論文には、筒井氏は「本書によると「利休百首」を最初にまとめたのは「慶長三年」ということになるわけだが、そのまま信ずることはできない(6)と述べている。

そして、今日庵本の成立年代について、同氏は次の見解を示している。

元禄年間にまとめられたものであることがわかる。ただし元禄年間には「乙丑」の年はない。だが、『茶湯秘抄』の宝永五年(一七〇八)よりは数年以前であるから、本書が「利休」の名を百首に冠した最初であるということができる。(7)

芸大本の成立年代については、写本の末尾に書かれている日付によると、安永二年(一七七三)に書写されたものと判断することができる。前述した筒井氏の見解に照らし合わせて見ると、芸大本の成立は今日庵本より数十年遅いということになる。

さて、筒井氏によれば「慶長三年」の信憑性は期待られないが、芸大本の序文に書かれている「書つけ侍れは漸百首に成」に基づけば、慶長期には「茶湯百首」として意図的にまとめる文芸的営為がすでに始まった可能性が全くないわけではないと考える。というのは、茶の湯の歴史においてよく注目されている数件の出来事が慶長期に起きたからである。代表的なことを挙げれば、疑問とされる慶長三年には、一番知られているのは千利休の切腹に導いた人物となる豊臣秀吉の死去であろう。そして、慶長四年(一五九九)には、古田織部は小堀作介(遠州)、金森長近(宗和の父)ら武将とほか三十人ほど堺衆と吉野の花見に出かけた途中、「利休妄魂」と書かれた額を打った「ニナイ茶屋」を持ち出したと『松屋会記』に記録されている。

千利休が自殺して以降、わび茶の道統が武家茶人に継がされたようだが、慶長年間千少庵とその子宗旦は利休の茶の湯をめぐる再興活動も開始している。谷端昭夫氏が指摘しているように、「慶長年間は政治史上でも豊臣、徳川勢力が相争う激動期であった。茶道史でもこれは同様で、利休亡き後の新たな茶の湯が模索され、幾らかのスタイルが形成られ始めていた」。(8)その背景の下、古田織部を代表とした武家の茶の湯者は武家茶道を当時の茶の湯主流として普及しようとして、あるいはわび茶の道統を取り戻そうとしたわび茶人たちは道の心得や手前の次第の教諭を目的に、「茶道百首」をまとめたことはありうる推定だと考える。

三　芸大本と紹鷗百首の関係

芸大本『利久居士茶道百首』は「炭寸法之覚」（原本に付けられている題名）、「二十六首和歌」と「百首和歌」（小論の筆者が後に付した題名）という三つの部分より構成されている。小論では「炭寸法之覚」は後考に委ね、まず「二十六首和歌」について考察を進める。

1　芸大本「二十六首和歌」と「武野紹鷗茶歌百首」「それ以外の紹鷗茶道歌」の関係

これまで調査しえた写本と板本のみならず、先行研究においても「二十六首和歌」類似の和歌が一首も見出しえなかったが唯一、彦根藩資料調査研究委員会によって編集した『史料井伊直弼の茶の湯　上』に収録され、井伊直弼がまとめた『茶道歌集』(9)中の「武野紹鷗茶歌百首」と「それ以外の紹鷗茶道歌」に二首ずつ見出された。以下はその対照表である（両書で本文の異なる箇所に傍線を付した）。

【表一】

芸大本「二十六首和歌」	「武野紹鷗茶歌百首」
貴人なとあい客ならは我かたな	貴人なと相客ならハ我かたな
はなかみしきてかへにもたせよ	はな紙しきて壁にもたせよ
こほしをはひさより少さけて	こほしをハ膝より先へ出すなよ
おけ　すゝきをうつにものけり	すゝきをいるゝうつはものゆゑ

芸大本「二十六首和歌」	「それ以外の紹鷗茶道歌」
上のたなくはんと羽箒外にまた	上の棚鐶と羽箒外にまた
羽とかうはこもかさるものなり	羽と香合とかさるものなり
茶巾をは水さしのまへもしは又	茶巾をは水指のうへもしハ又
ひさくおくへきたなのはしにも	柄杓置へき棚の端なり

右の対照表から分かるように、「二十六首和歌」と「武野紹鷗茶歌百首」と、また、「二十六首和歌」と「それ以外の紹鷗茶道歌」とは同じ意味を持つ漢字と仮名の置き換え以外完全に一致する。傍線を施した四箇所に存在している相違を除けば両者は同様のものと見られる。

さて、「二十六首和歌」と紹鷗百首とはどのような関係になるのだろう。この疑問を解明するために、まず注目したいのが「武野紹鷗茶歌百首」と「それ以外の紹鷗茶道歌」の間に書き加えられた井伊直弼の注記である。

右紹鷗茶歌百首世々数本ありて入たる歌と又除きたる歌と互ニ混乱し一様ならす、上ニあらわすハ多分ニ入たる歌ともをゑらむ也、猶右之外ニ伝はりたる歌共ニ記す(10)

右の注記から分かるのは次の三点となる。

①紹鷗茶歌百首が世々数本流布していた

②収録された和歌が混乱したため「武野紹鷗茶歌百首」は不完全である

③「それ以外の紹鷗茶道歌」を補充したものである

このように、「武野紹鷗茶歌百首」と「それ以外の紹鷗茶道歌」は恐らく井伊直弼が当時触れた〈紹鷗茶歌集成〉のようなもの

となっていたのだろう。

次に、同書には『茶道歌集』の本文だけでなく、その書誌情報、成立、内容などについても詳しく指摘されている。その校合成果によると、「武野紹鴎茶歌百首」の内八十一首、「それ以外の紹鴎茶道歌」五十三首の内二首が続群書所収『紹鴎茶湯百首』（以下続群書本と称す）とほぼ同じである。上述した井伊直弼の注記と併せて考えると、「武野紹鴎茶歌百首」と「それ以外の紹鴎茶道歌」の底本は続群書本以外別に存在することには疑問の余地がない。

国文学研究資料館「日本古典籍総合目録データベース」に収録されている鍋島報効会から佐賀県立図書館に寄託の『紹鴎百首』（以下佐賀本と称す）は続群書本の異本であるにもかかわらず、石塚修氏の研究成果(11)を参考すれば佐賀本の他にも異本が存在することが分かる。

以上のごとく、「二十六首和歌」は続群書本と佐賀本と同じ紹鴎百首系統に属する異本の一部分である蓋然性が高い。

2　芸大本「百首和歌」と続群書本、佐賀本の関係

各伝本との関係を明らかにするため、それを次の七本の伝本と校し、和歌の配列と有無を文末の和歌配列表にて示した。

①写本『利休百首和歌』（架蔵本1）江戸後期　九十首
②版本『利休茶湯百首』（慶應本）宝暦二年（一七五二）
　九十四首　慶應義塾大学三田メディアセンター所蔵
　請求記号：一二八―二八―一
③写本『利休茶道謌』（東大本1）江戸後期　九十四首
　東京大学総合図書館南葵文庫所蔵
　請求記号：YB二十―五六六
④写本『利休居士茶歌百首』（東大本2）宝暦二年七月
　九十八首　東京大学総合図書館南葵文庫所蔵
　請求記号：YB二十―六八
⑤写本『利休居士教諭百首詠』（架蔵本2）江戸後期
　九十九首
⑥写本『紹鴎百首』（佐賀本）　江戸後期　百首
　鍋島報効会から佐賀県立図書館に寄託
　請求記号：九九一―二〇三九―九九一・一
⑦写本『紹鴎茶湯百首』（続群書本）文政十一年（一八二八）
　百五首　マイクロ請求記号：二十―一四六―一―六一五

文末の表を概観するに、②慶應本と③東大本1は配列において完全に一致し、①架蔵本1は両本との配列が異なるが歌の有無がほぼ一緒であるため、この三伝本は同じ系統（小論では慶應本系統と称す）に属することが一目瞭然である。

さて、芸大本は他の伝本に対して、どのような関係にあるのだろうか。表の歌の有無状況を一見するだけで明らかなように、芸大本、⑦続群書本と⑥佐賀本三伝本の内八首の和歌が上述した慶應本系統の三伝本と④東大本2を含めた四伝本の伝書に存せず、さらに芸大本と⑦続群書本両本の内の二首も見えない。芸大本、⑦続群書本と⑥佐賀本三伝本の異同をより分かりやすくするために、文末に対照表を作成した（後掲【表二―一、二―二】参照）。

傍線を施した部分を除けば、明らかに三本の本文は一致している。他の伝本に比べて、芸大本にのみ存在する歌と芸大本にのみ存在しない歌がそれぞれ数首あることに基づいて、芸大本は⑦続群書本、⑥佐賀本と同一系統に属するとまではいえない

が、少なくとも慶應本系統より、芸大本は⑦続群書本、⑥佐賀本により近いということは認めて良いと思う。

四　「二十六首和歌」「百首和歌」に見る芸大本の意義

文献資料の意義を判断するとき、重要な手段と見られるのは制作者の分析である。しかし、芸大本の制作者が不明のため、本節ではその構成内容「二十六首和歌」「百首和歌」を手がかりとして芸大本の意義を考察したいと思う。

「二十六首和歌」のすべてが前節で挙げた七伝本には存しないことはすでに明らかにした。異なる歌というものの、掛物・茶入・茶巾などに関する歌は七伝本の中に類似するものが見つかり、露地に関しては「利休教歌三十一首」(12)に同類の歌も見られる。ただ一つ特別な存在は貴人に関する歌である。

貴人なとあい客ならは我かたな
はなかみしきてかへにもたせよ

前文で述べたように、この歌は「武野紹鴎茶歌百首」にもある。ほかには、和歌ではないが、『烏鼠集』には貴人に対する条文が四十五か条がある(13)。『石州三百箇条』には貴人に対する心遣いを示す条文が七か条あると桑田忠親氏が「片桐石州と茶道芸術」に指摘している。「将軍家茶道」(14)の色彩を持つ貴人点式であるため、貴人条文が逓減している『烏鼠集』と『石州三百箇条』に続いて、芸大本はその変遷の末尾にあり、「将軍家茶道」の色彩が残された。

「百首和歌」の部分については、実数百首に整えていることについて『法護普須磨』(15)を加えて、同じく百首の和歌を持つ芸大本、佐賀本、『法護普須磨』の間にどのような関係を持っているか、そして和歌の入れ替えと異動に示されるものについて論を進めたい。成立時期から並べると、上述した三伝本の順序は次の通り。

芸大本（一七七三年）
紹鴎百首佐賀本（一八一八～一八九八年）
法護普須磨（一八五六年）

内容に関しては、芸大本と佐賀本について対照してみると、佐賀本は芸大本に比べて手前の心得や炭手前、茶入及薄茶器に関わる十四首の和歌を添加していることがわかる(16)。

何にても道具扱ふ其時は取手はかろくておく手重かれ
口広き茶入の茶をは汲と云せはき口をはすくふとそ云
筒茶碗ふかは底よりふきあかれ重て内へ手はやらぬもの
客になり炭するならはいつとても薫物なとは客たかぬもの
崩れたる其白炭をとり上て又もまた置事はなきもの
風炉にては炭はなきもの見ぬ迚も見ぬこそ猶そ見ると知へし
何にても道具置付かゑる手は恋しき人に別るるとしれ
茶入より其茶すくはは心得て初中後すくゑそれか秘事也
湯を汲て茶碗に入る其時は柄杓はひくな我が肱を引
花見より帰りの人に茶の湯せば花取来る絵も花も置
不時なとに客の来らは手前をは心はさうにわさは慎しめ
右の手を扱ふ時は我心左の方の手の内にもて
なまるとは道にて早く又遅くところどころにむらあるをいふ

板床に葉茶壺茶入名物をかさらぬものと伝へてそ聞

（『紹鴎百首』のもたらす意味―佐賀県立図書館蔵本の紹介を中心に」二五六～二六一頁参照）

これらの和歌は法護普須磨にも存する。それから、上記の十四首のほか、芸大本と佐賀本両本と対比すると、法護普須磨はそれぞれ八首、十首の茶道と修業の和歌を追加した。

「芸大本と佐賀本両本に存しない八首」

稽古とは一よりならひ十をしり十よりかへるもとの其一

茶の湯をハこころに染て目にかけす耳をそはめて聞事も無

水と湯と茶巾茶筅に箸やうし柄杓と心あたらしきよし

茶はさひて心はあつくもてなせよ道具はいつも有合にせよ

茶の湯にハ梅寒菊に木葉実落青竹枯木暁のしも

茶の湯とハ只湯をわかし茶を点てのむはかりなる事と知へし

本来もなきいにしへの法なれと今そ極る本来の法

規矩左法護り盡して破るとも離るるとても本をわすれな

「芸大本に存して佐賀本に存しない二首」

目にも見よ耳にもふれよ香をききて事をとゐつつ能合点せよ

ならひをは塵芥そとと思へかし書物は反古こし張になせ

（『近代黎明期の茶の湯　裏千家十一代玄々斎宗室の時代』(17)「利休居士教諭百首詠」翻刻一七九～一八〇頁参照）

逆に、芸大本にあった十三首の和歌は佐賀本と法護普須磨にはなく、佐賀本にあった十二首の和歌は法護普須磨にもない。しかも、この十三首と十二首は完全に異なる内容である。

「芸大本に存して佐賀本と法護普須磨に存しない十三首」

花いけはゑんのきらすなその花のつり合しりて生る物なり

其花のゑんのきるゝをしる時はあかたまふたつ合に白玉

花いけはあいをきらすな続よくさい〳〵生てよくかてんせよ

細口の花いけならはいつとても水すこし入生るものなり

四畳半大目にむかひ蓋おかはふちより三つめ大小による

こしき釜ひさくは内へいるなれはわくちはふちへかけてこそおけ

わくちとてふちへかたりと一すしにおもふなそれも口のたかひく

よの中にふくささはきをてまはしにきりてふくはこのまさりけり

ひさくをははつませつかふ人おほくしさひの茶をは何とたつらむ

音たかく茶わんのふちを茶杓にてうつは又なきあやまりそかし

下手と見て人を見こなす人は下手とらへて後のつとはしられす

功つめて習はぬとてもいつとなくしせんにかなふふしきなりけり

よしあしはそのいにしへの和尚よりつたへをきにし書物にとへ

（本稿芸大本翻刻参照）

「佐賀本に存して法護普須磨に存しない十二首」

茶杓にて翻しをたたく人多しとても服紗てふくものそかし

夏ならは炭をさいろうかな火はし木地の香合ぬる物としるへし

夏なとは水次もまたかねかよし冬は塗たる志の片口

夏目にて濃茶をたてはいつとても蓋するときは服紗にてふけ

我呑しすすきの跡をはいたたきてのむはあやまるあしらひと聞

輪口をは姥口すへに居へてよきされとかつこふ見合てせよ

中央に香匙火筋指すならは灰押左なり火はし右なり

薄板は長み一尺三寸五分横のひろさは九寸とそきく

絵によりて花に心はおふからぬ風にたてつく草花はなし

兼てより約束しける客ならは心は真に業はかろかれ

小壺にて茶をたつるにはすくふともくむともいわすさしぬくと云

何にても花を拝見する時は扇るをぬきて寄て見るもの

（『紹鴎百首』のもたらす意味―佐賀県立図書館蔵本の

紹介を中心に」二五六～二六一頁参照）

前述のように、三伝本はともに百首の歌をもつものの、各々のなかに収められている和歌に数首の入れ替えが見られる。これによると、三伝本のそれぞれが独立した存在であり、三つの系統に見られるほうが適切であろう。

さて和歌の入れ替えに関してどういう意味をもたらすのか。三伝本の大部分が一致しているが、その間に横たわるこれほどまでに顕著な相違は、その原因は地域差だけでなく、時代的な変遷にも求めうるのではないかと考えられる。地域差に関しては、十分な資料はないため、今後の研究を俟たねばならない。

時代的な変遷から見ると、三伝本が成立された江戸中後期の茶の湯について、筒井氏による「遊芸化から精神化へ」と変わったという指摘がある。前文に挙げている入れ替えの和歌の内容から、時代の変遷により筒井氏が指摘されたような茶の湯の変化が見えるが、制作者自身の意識を直接うかがわれるのは芸大本であろう。なぜなら、芸大本「二十六首和歌」と「百首和歌」の間に、別のものとして次の一首がある。

ほの〳〵とあかしの　　（四〇九）
うらのあさ霧に
　嶋かくれゆく　　おもふ
　　舟をしそ

『古今和歌集』巻第九「羇旅歌」に収録されており、読人不知歌である。ここで注目したいのは芸大本より数十年前に薮内竹心が著した『茶道霧乃海』である。その成立について、谷端昭夫氏は「薮内竹心の手になる『茶道霧乃海』は、序によれば茶道興隆期にあたる元禄期前後の茶道界が、「正風の意趣一向磨滅」して「途方を失」い、あたかも「霧海ニ南針を失ふ」ような状況であることを嘆き、これを「正風に吹きかへさんこと」を願って記したものであるとしている」(18)と指摘している。芸大本の一首はそれと別の物であるが、類似した意味を持つ和歌を入れたのは作者がこの百首和歌を以て特定な目的を果たすからであろう。それは恐らく、竹心の意図に一致していると考えられる。

五　おわりに

小論において、東京芸術大学附属図書館蔵『利久居士茶道百首』に焦点をあてて、その成立年代と構成内容を検討した。

和歌の有無から、『紹鴎百首』諸伝本の和歌との校合を通じて、芸大本は「利久」を冠したものの、『利休百首』系統より『紹鴎百首』系統に近いことが確認できた。

和歌内容の面では、芸大本は「将軍家茶道」の色彩を残っているとともに、意識的に「侘茶」の精神性を追及した制作者の姿勢がうかがわれる。そして成立年代から見ると、芸大本は十八世紀に成立したものとして、現時点で知りうる茶道和歌伝本において百首に整っている最古のものといえ、百首に整えた時期を一八五六年にまとめられた『法護普須磨』より八十年以上前に遡ることができるのも芸大本の意義であろう。そして、安永二年頃、表千家第七代千宗左（如心斎）や裏千家第八代千宗室（一燈）が活躍し、七事式という新たな作法を制定した時期に当たる。これは茶道流派における家元システムの形成と発展

にも関連を持っているではないかと推測できよう。

(1) 近年、それに関して二冊の著書が出版された。阿部宗正著『利休道歌に学ぶ』（二〇一三年八月十一日）と淡交社編集局編『利休百首ハンドブック』（二〇一三年五月二十三日）である。そのうち、阿部宗正著『利休道歌に学ぶ』は二〇〇〇年十一月二十六日に初版発行以来、二〇一三年に至るまでに八版発行までになっていて、広く世に迎えられていることがわかる。

(2) 筒井紘一『茶書の系譜』（文一総合出版、一九七八年十一月三十日）一一七頁

(3) 筒井紘一『茶書の系譜』一三一頁

(4) 筒井紘一『茶書の系譜』一二八頁

(5) 筒井紘一『茶書の系譜』一一六、一一七頁

(6) 筒井紘一「茶湯百首について（三）―道歌の成立と発展―」（『茶湯』十三号　一九七七年）十八頁

(7) 筒井紘一『茶書の系譜』一一八頁

(8) 谷端昭夫『よくわかる茶道の歴史』（淡交社　二〇〇七年）一三四頁

(9) 彦根藩資料調査研究委員会編『史料井伊直弼の茶の湯』上（彦根城博物館、二〇〇二年）二〇八～二一九頁

(10) 彦根藩資料調査研究委員会編『史料井伊直弼の茶の湯』上（彦根城博物館、二〇〇二年）二一二頁、三五二頁

(11) 石塚修「『紹鴎百首』のもたらす意味―佐賀県立図書館蔵本の紹介を中心に―」『武野紹鴎わびの創造』（思文閣出版、二〇〇九年）二五五～二六一頁佐賀本釈文には表一の歌はない。

(12) 利休が『南坊録』を著した南坊宗啓に示したものと伝えられる。

(13) 『烏鼠集』（『茶道文化研究』第一輯）一〇六～二三一頁巻一に「貴人」「貴客」を含めて十九か条、巻二になし、巻三に十五か条、巻四に十一か条

(14) 町田忠三「『石州三百個条』成立の背景と将軍茶道師範」（『茶の湯文化学』十号　二〇〇五年三月）の中の説を引用した。

(15) 裏千家十一代家元玄々斎が筆写したもの、安政三年（一八五六）に出版されたにつれて多くの人に知られるようになった。前節で取り上げた写『利休居士教諭百首詠』（架蔵本2）とは同じ題を持っているが、後者には九十九首和歌を持つことから見ると、『法護普須磨』とは異本であることが分かる。

(16) 金澤宗爲編『利休百首私解』（茶道月報社　一九二七年十二月）内容索引参照

(17) 茶道資料館編『近代黎明期の茶の湯　裏千家十一代玄々斎宗室の時代』（二〇〇一年十月）

(18) 谷端昭夫「藪内竹心と「茶道霧乃海」」『茶湯』十三号（思文閣出版　一九七七年九月）四十四頁

【凡例】

・底本には、東京芸術大学附属図書館（上野校地図書館本館）所蔵『利久居士茶道百首』を用いた。
・改行、仮名遣、清濁などは底本のままとした。
・漢字は、通行の字体に統一した。
・虫損などにより判読が難しいところは□で示した。
・明瞭のため、小論の筆者が後に付した題名「二十六首和歌」と「百首和歌」を加えており、それぞれの通番号を歌の下に漢数字で示した。

右百首つれ〳〵なる折しも炉辺に
座してあとさきとなきそゝろこと
書つけ侍れは漸百首に成もとの
功志の心にもかひもやすらむ
しかはあれとも初心を道ひかん便
ともならむかし

慶長三戊戌年　利休居士

十月朔日　宗易

炭寸法之覚

輪炭丸三寸三分厚サ二寸三分
丸み二寸一分長サ六寸
丸み一寸九分半長サ四寸四分わり
丸み一寸長サ二寸五分
丸み一寸一分半長サ三寸一分わり
丸み一寸一分長サ二寸七分
丸み一寸長サ二寸二分

「二十六首和歌」

一露地あけてまつこなたより遠見して　一
こゝろしつかに入ものそかし
一客入てあとはしまひのやくなれは　二

露ちの戸をしめかけよかけかね

一中くゝり入はうへこえさてはまた　三
ほのかにみえしかくをこそみめ

一客なとの手水つかはゝ先まへに　四
ひさくをきやうかねをわするな

一かたなをは上につりたるたなにをき　五
わきさし扇子したたなにおく

一貴人なとあい客ならは我かたな　六
はなかみしきてかへにもたせよ

一にしりあかり入てそのまゝ床をみて　七
たいめにうつり棚かまを見よ

一座につかはすこしほとくは見合て　八
てい主は出て一禮をいふ

一炭しまひたき物くへて香合の　九
ふたするときに所望こそすれ

一会席のすはらは客もひさをたて　十
膳をいたゝきしたにこそおく

一膳をあけ茶くはゝ出さす其後は　十一
はやく手水にたつものそかし

一絵をまきて床には花を入おきて　十二
おき含して客入をまつ

一とらをうたは客もこゝろ得手水して　十三
花をまつみて置合見よ

一置あわせ残らす客も見しまはる　十四
てい主は出てちやを立るなり

一名物のちやいれはいけんするときは　十五
手をのこひつゝつゝしんて見よ

一名ふつのちや入出たる茶の湯には　十六
はやく所望をするとこそきけ

一わひなとの手まい拝けんする時は　十七
しまはせてのち茶入みてよし

一茶入見て本座へ返し置て後　十八
てい主は出てちや入とりこむ

一もしはまた釜のふたなとは大きくは　十九

そとへ出してをきもするもの

一しまひては柄杓すくかへふた置は　二十

下へおろして水指のまへ

一くさりにてすみするならはつるはまた　二十一

釜おくかたのかへにもたせよ

一上のたなくはんと羽箒外にまた　二十二

羽とかうはこもかさるものなり

一ふた置に五とく出さは心得て　二十三

うへしたかへし釜のふたおけ

一茶巾をは水さしのまへもしは又　二十四

ひさくおくへきたなのはしにも

一たな置てちや立るならは茶巾をは　二十五

ふくためてをくさほう成りけり

一こほしをはひさより少さけておけ　二十六

本ノママ

すゝきをうつにものけり

ほの〳〵とあかしの

うらのあさ霧に　『古今和歌集』四〇九

嶋かくれゆく　おもふ

舟をしそ

「百首和歌」

一その道にいらむとおもふ心こそ　一

わか身なからの師道なりけり

一ならひつゝ見てこそしるれ習はすに　二

よしあしいふはおろかなりけり

一心さしふかき人には先たちも　三

あはれみふかくよくそおしゆる

一我をすて人に物とひならふ社　四

のちは上手のもとゐ成けり

一上手にはすきと器用と功つむと　五

此みつそろふ人こそはなれ

一手まへをはよはみを見すなたゝつよく　六

されと風そくいやしくなしそ

一手まへをはつよみはかりとおもふなよ　七
つよきはよはくかるくおもかれ

一手前とはうすちやにあるときく物を　八
そさうにおもふ人はあやまり

一濃茶には手まへをすてゝ一すしに　九
ふくとかけんといきちらすな

一こひ茶には湯かけんあつくふくな猶　十
あはなきやうにかたまりもなく

一とにかくにふくのかけんをおほゆるは　十一
こいちやさい／＼たてゝよくしれ

一茶をたてはちやせんに心よくつけて　十二
ちやわんのそこへつよくあたるな

一中つきのふたはよこてにかけてとれ　十三
ちやさくまろくにおく物そかし

一他所にては茶を入て後ちやしやくにて　十四
ちやはんのふちをうたぬものなり

一棗をはふたはうへよりかけてとれ　十五
ちやさくもうへにをく物そかし

一うす茶入まきゑほりものあるならは　十六
順逆おほえたつるものなり

一棗にて濃茶をたてはいつとても　十七
ふたする時はふくさにておけ

一肩衝は中続と又おなし事　十八
そこにゆひをはかけぬ物なり

一文琳や茄子まる壺なつめにも　十九
そこへゆひかけもつはあやまり

一大海を應答ときは大ゆひを　二十
かたへかくるは習とそきく

一しめさゝる茶巾さはきは湯を少し　二十一
こほし残してあしらふときく

一我のみしすゝきの跡をいたゝきて　二十二
のむはまたなきあやまりそかし

一すみをくに習ふはかりにかゝはりて　二十三

ゆのたきらさるすみはけし炭

一炭おくにたとひ習にそむくとも　二十四
ゆのよくたきる炭はすみなり

一客になり炭するならはいつとても　二十五
いろりのかとをくつしくすすな

一くすれたるしら炭あらはすてゝ置　二十六
またよのすみをおく物そかし

一客になり風爐のもの内みるならは　二十七
灰くつれなん気遣をせよ

一墨せきをかくる時には啄木を　二十八
勝手のかたへ大かたはひけ

一絵の物をかくる時には啄木を　二十九
印あるかたへひくとこそきけ

一絵にもまた左右向真むきあり　三十
もし又床の勝手にもよる

一こしき釜いろりふちより六七分　三十一
たかくすゆるは習とそきく

一うは口はいろりふちより六七分　三十二
さけてかくるは習なりけり

一輪口をはうは口すへにするてよし　三十三
さつとかつこう見合てよし

一しな〳〵のかまによりての名は多し　三十四
かまの惣名くはんすとそきく

一置合こゝろをつけて見るそかし　三十五
ふくろの縫めにてろみにをけ

一はこひ手前水さしおかはよこたゝみ　三十六
ふたつにわりてまん中におけ

一ちや入また茶筅のかねをしるならは　三十七
あとにのこせる道具めあてに

一よそなとへ花をおくらはそのはなの　三十八
ひらき多くはやらぬものなり

一つり舟はくさりの間八寸に　三十九
出ふね入ふねさてはをき舟

一壺なとを床にかさらむ心あらは　四十

はなより先にかさるものなり

一夏手まへかならす釜に水さすと
一すしにいふ人はあやまり　四十一

一夏なりとゆのたきらすはふたしめて
なとあやまりと人のいふへき　四十二

一手桶をは手はよこにして置ぞかし（ママ）
まへのふたとりさまへかさねよ　四十三

一釣瓶をは手はたてに置ふたとらは
くみかたとりて脇へかさねよ　四十四

一小板にて茶をたてんとき茶巾をは
こいたのはしにおく物そかし　四十五

一茶杓にてたかしのふちをたゝく人
とてもふくさてふくものそかし　四十六

一かけ物の釘うつならは大輪より
九分下てうて釘も九分成り　四十七

一中央にきやうしこしさす其時は
はいなし左火はし右なり　四十八

一喚鍾ははしめ三ッにのちふたつ
合て五つうつとこそきけ　四十九

一茶をふらは手先てふるとおもふなよ
ひしにてふるかそれかひし也　五十

一湯をくまはひさくに心月の輪の
そこねぬやうに心得てくめ　五十一

一ひさくにて湯やまた水を汲時は
汲とおもはし持とおもはし　五十二

一床にまた古今集なとおてめおかは
外の哥書をはかさらぬときく　五十三

一外題ある物の本なとみる時は
功者に一たひ見せてひらけよ　五十四

一香合や鐶か羽箒かさりをかは
右羽ひたり羽吟味してをけ　五十五

一名物の茶碗いてたる茶の湯には
すこし心得かはるとそきく　五十六

一朝会にすきやの内は行燈に　五十七
夜会にはまた短檠そかし
一燈に油をつかはおほくつけ　五十八
客にあかさる心得としれ
一燈に陰と陽とのかはりあり　五十九
朝をは陰に晩は陽なり
一いにしへは夜会なとには床もまた　六十
かけ物はなもなきとこそきけ
一夏なとはすみも細篭かな火はし　六十一
きやらきに香合へき物としれ
一冬くれは炭もふくへに柄の火はし　六十二
木地香合にたき物としれ
一いにしへは名物なとの香合に　六十三
直にたきものいれぬとそきく
一夏くれは水次も又かねのもの　六十四
冬はぬりたるしんのかたくち
一蓋置に三つ足あらは足二つ　六十五
むかふへなすと心得ておけ
一二畳台三畳たいの水さしは　六十六
まつ九目にをくとこそきく
一茶巾をは長み布はくよこはまた　六十七
ぬいたて七寸五寸五分にも
一帛をは九寸一尺ほかにまた　六十八
八寸九寸にする人もあり
一薄板は長み一尺三寸五分　六十九
よこのひろさは九寸とそきく
一うす板は床かまちより十七め　七十
または十八十九めにおく
一薄板も床の大小実はまた　七十一
道具に寄てかはる品〳〵
一花入の打釘はまた地敷より　七十二
三尺弐寸五分か三寸
一花入に大小あらは見合て　七十三
かねをはつしてうつは法なり

一竹釘はかはめを上へ打ときく
かはめを下へうつはあやまり　七十四
一三ッ釘は中のくきより両脇の
七寸三分間を置てうて　七十五
一三ふくの絵をかくるには中をかけ
ちく先をかけ次にちくわき　七十六
一かけ物をかくる時にはかへ付を
一分の間をおくとこそきけ　七十七
一絵によりてはなの心はおほからむ
かせにたてつく草はなはなし　七十八
一かねてより約束しける客ならは
心を真にことをかろかれ　七十九
一笠山のかさりのときはかけものも
山水なとはさし合としれ　八十
一床にまた籠はな入に花いけて
うす板なとはしかぬものなり　八十一
一生花をよりて拝見するならは
三尺よけてこなたにて見よ　八十二
一何時も花をはいけんするならは
扇子をぬきてよりてみる物　八十三
一花いけはゑんのきらすなその花の
つり合しりて生る物なり　八十四
一其花のゑんのきるゝをしる時は
あかたまふたつ合に白玉　八十五
一花いけはあいをきらすな続よく
さい〳〵生てよくかてんせよ　八十六
一細口の花いけならはいつとても
水すこし入生るものなり　八十七
一四畳半大目にむかひ蓋おかは
ふちより三つめ大小による　八十八
一こしき釜ひさくは内へいるなれは
わくちはふちへかけてこそおけ　八十九
一わくちとてふちへかたりと一すしに
おもふなそれも口のたかひく　九十

一すみおくに五とくの上をこす時は
かまをかけてはくつなるとしれ　九十一
一よの中にふくささはきをてまはしに
にきりてふくはこのまさりけり　九十二
一ひさくをははつませつかふ人おほく
しさひの茶をは何とたつらむ　九十三
一音たかく茶わんのふちを茶杓にて
うつは又なきあやまりそかし　九十四
一ひと手まへたつか内にもよしめしの
わかちをはしれうむのこゝろを　九十五
一下手と見て人を見こなす人は下手
とらへて後のつとはしられす　九十六
一功つめて習はぬとてもいつとなく
しせんにかなふふしきなりけり　九十七
一目にみても耳にふれつゝかをかきて
ことをとひつゝかてんせよかし　九十八
一よしあしはそのいにしへの和尚より
つたへをきにし書物にとへ
一習をはちりあくたそとおもひしれ　百
書物は反故こしはりにせよ

安永二癸巳年霜月朔日　岩波氏（ママ）舄之

【和歌対照表二―一】
便宜上、各歌の最後にそれぞれにおける通番号を付けた。

芸大本	続群書本	佐賀本
手まへをはつよみはかりとおもふなよ　つよきはよはくかるくおもかれ　七	手前をは強み計と思ふなよ　つよきによわく軽く重かれ　七	手前をはつよみはかりとおもふなよ　強きはよわくかるく重かれ　七
こい茶には湯かけんあつくふくゆ　あわなきやうにかたまりもなく　十	濃茶には湯かけんあつくふくは　猶　淡なき様にかたまりもなき　十一	こひ茶には湯加減あつく服はなを　あわなきようにかたまりもなく　十七
すみをくに習ふはかりにかゝはりて　ゆのたきらさるすみはけし炭　二十三	炭置に習計にかゝわりて　湯のたきらさる炭はけしすみ　二十六	炭置に習はかりにかゝわりて　湯のたきらさる炭はけし炭　三十二
客になり炭するならはいつとても　いろりのかとをくつしくすな　二十五	客になり底取ならはいつとても　いろりの角を崩し崩すな　二十八	客になり底取ならはいつとても　囲炉裏の角を崩しくつすな　三十四
絵にもまた左右向真むきありもし又床の勝手にもよる　三十	絵にも又左り右向真向有若亦床の勝手にもよる　三十七	絵にもまた右左向真向ありもし又床の勝手にもよる　四十三

芸大本	夏なりとゆのたきらすはふたしめて　なとあやまりと人のうふへき　四十二	茶をふらは手先てふるとおもうなよ　ひしにてふるかそれかひし也　五十	夏くれは水次も又かねのもの　冬はぬりたるしんのかたくら　六十四	生花をよりて拝見するなら　は　三尺よけてこなたにて見よ　八十二	習をちりあくたそとおもひしれ　書物は反故こしはりにせよ　百
続群書本	なつなりと湯のたきらすは蓋〻て　持あやまりになりは成まし　五十	茶をふらは手先てふると思ふなよ　ひちにて振りそ夫か秘事也　五十九	夏なとは水次も又かねのもの　冬はぬりたるしんの片口　七十五	立花なと寄て拝見する時は三尺有て此方にて見よ　百一	習をは塵芥そと是を知れ書物は反古腰張にせよ　百五
佐賀本	無	茶をふらは手先てふるとおもふなよ　ひちにてふるかそなか秘事也　六十四	夏なとは水次もかねかよし冬は塗たる志の片口　十三	立花なとよりて拝見する時は三尺ありてこなたより見よ　九十九	無

【和歌配列一覧】

利休百首和歌（架蔵本1）	慶應本	東大本1	東大本2	利休居士教諭百首詠（架蔵本2）	芸大本	紹鷗百首佐賀本	紹鷗百首続群書本
一	一	一	一	一	一	一	一
二	二	二	九七	二	二	二	二
三	三	三	二	三	三	三	三
四	四	四	三	四	四	四	四
×	×	×	×	五	五	五	五
五	五	五	七	六	六	六	六
六	六	六	四	七	七	七	七
七	七	七	二三	八	×	八	八
八	八	八	二二	九	九	九	九
九	九	九	六四	一〇	一〇	一六	一〇
×	×	×	×	一一	一一	一七	一一
一〇	一〇	一〇	六五	一二	一二	一八	一二
一一	一一	一一	二五	×	一三	一九	一三
一二	一二	一二	二六	一三	一四	二〇	一四
一三	一三	一三	五〇	一四	一五	二一	一五
一四	一四	一四	五一	一五	一六	二二	一六
一五	一五	一五	四七	一六	一七	二三	一七
一六	一六	一六	四三	×	一八	二四	一八
一七	一七	一七	四五	一七	一九	二五	一九
一八	一八	一八	四六	一八	二〇	二六	二〇
一九	一九	一九	四八	一九	二一	二七	二一
二〇	二〇	二〇	五三	二〇	×	二八	二二
二一	二一	二一	四二	二一	×	二九	二三
二二	二二	二二	×	二二	二一	三〇	二四

利休百首和歌（架蔵本1）	慶應本	東大本1	東大本2	利休居士教諭百首詠（架蔵本2）	芸大本	紹鴎百首佐賀本	紹鴎百首続群書本
二二	二三	二三	×	×	二二	三一	二五
×	×	×	×	二七	二三	三二	二六
×	二四	二四	三二	二三	二四	三三	二七
×	×	×	×	三〇	二五	三四	二八
二五	二五	二五	三五	二四	九一	三五	二九
二六	二六	二六	三三	二五	×	三六	三〇
二四	二七	二七	三四	二六	二六	三七	三一
二六	二八	二八	×	二八	×	三八	三二
二五	二九	二九	六一	二九	×	三九	三三
二七	三〇	三〇	三八	三一	二七	四〇	三四
二八	三一	三一	七一	三二	二八	四一	三五
二九	三二	三二	七二	三三	二九	四二	三六
×	×	×	×	三五	三〇	四三	三七
三〇	三三	三三	五七	三四	三一	四四	×
三一	三四	三四	五八	三六	三二	四五	三九
三二	三五	三五	×	×	三三	四六	四〇
三三	三六	三六	×	三七	三四	四七	四一
三四	三七	三七	五九	三八	三五	四八	四二
三五	三八	三八	五五	三九	三六	四九	四三
三六	三九	三九	四四	四〇	三七	五一	四四
三七	四〇	四〇	二四	四一	×	五二	四五
四五	四一	四一	八四	四二	三八	五三	四六
×	×	×	×	×	四二	×	五〇
三八	四二	四二	四三	四三	四三	五七	五一
三九	四三	四三	×	四四	四四	五八	五二
四〇	四四	四四	六二	四五	四五	五九	五三

利休百首和歌（架蔵本1）	慶應本	東大本1	東大本2	利休居士教諭百首詠（架蔵本2）	芸大本	紹鴎百首佐賀本	紹鴎百首続群書本
四一	四五	四五	×	四六	四七	六〇	五五
四二	四六	四六	×	×	四八	六一	五六
四三	四七	四七	八三	四七	四九	六二	五七
×	×	四八	×	四八	×	六三	五八
×	四八	×	×	五二	五〇	六四	五九
四四	四九	四九	四〇	四九	五一	六五	六〇
四六	五〇	五〇	×	×	×	六六	六一
四七	五一	五一	三九	五一	×	六七	六二
四八	五二	五二	四一	五〇	五二	六八	六三
四九	五三	五三	六九	五三	五三	六九	六四
五〇	五四	五四	×	五四	五四	七〇	六五
五一	五五	五五	八二	五五	五五	七一	六六
五二	五六	五六	四九	五六	五六	七二	六七
五三	五七	五七	七七	五七	五七	七三	六八
五四	五八	五八	八一	五八	五八	七四	六九
五五	五九	五九	七八	五九	五九	×	七〇
五六	六〇	六〇	七九	六〇	六〇	七五	七一
五七	六一	六一	三六	六一	六一	一〇	七二
五八	六二	六二	七〇	六二	六二	一二	七三
五九	六三	六三	三七	六三	四二	一一	七四
×	六四	六四	×	×	六四	一三	七五
六〇	六五	六五	五四	六四	六五	一四	七六
六一	六六	六六	九〇	六五	六六	一五	七七
六二	六七	六七	八九	六六	六七	七六	七八
六三	六八	六八	七七	六七	六八	七七	七九
六四	六八	六八	九一	×	六九	七八	八〇

利休百首和歌（架蔵本1）	慶應本	東大本1	東大本2	利休居士教諭百首詠（架蔵本2）	芸大本	紹鴎百首佐賀本	紹鴎百首続群書本
六五	六九	六九	九二	六八	七〇	七九	八一
六六	七〇	七〇	×	六九	七一	八〇	八二
六七	七一	七一	九三	七〇	七二	八一	八三
六八	七二	七二	×	七一	七三	八二	八四
六九	七三	七三	九四	七二	七四	八三	八五
七〇	七四	七四	九五	七三	七五	八四	八六
七一	七五	七五	九六	七四	七六	八五	八七
七二	七六	七六	×	七五	七七	八六	八八
七三	七七	七七	八五	×	七八	八七	八九
七四	七八	七八	七三	七六	×	八八	九〇
七五	七九	七九	七五	七七	×	八九	九一
七六	八〇	八〇	×	七八	三九	五四	四七
七七	八一	八一	六三	七九	四〇	五五	四八
七八	八二	八二	六〇	八〇	四一	五六	四九
七九	八三	八三	七四	×	七九	九〇	九二
八〇	八四	八四	二九	八一	×	九一	九三
八一	八五	八五	三〇	八二	九五	九二	九四
×	×	×	×	×	×	九三	九五
八二	八六	八六	三一	八三	×	九四	九六
八三	八七	八七	五二	×	×	九五	九七
八四	八八	八八	七六	八五	八〇	九六	九八
八五	八九	八九	六六	八六	×	九七	九九
八六	九〇	九〇	六七	八七	八一	九八	一〇〇
×	×	×	×	×	八二	九九	一〇一
八七	九一	九一	×	×	八三	一〇〇	一〇二
八八	九二	九二	九八	八九	×	×	一〇四

利休百首和歌（架蔵本1）	慶應本	東大本1	東大本2	利休居士教諭百首詠（架蔵本2）	芸大本	紹鴎百首佐賀本	紹鴎百首続群書本
八九	九三	九三	×	九〇	×	×	×
×	九四	九〇	×	×	×	×	×
×	×	×	×	九二	九八	×	×
×	×	×	×	九三	一〇〇	×	一〇五